

## 【報告要旨】

# 第7回大会研究報告要旨

日本18世紀学会の第7回大会は1985年5月25、26の両日、高知大学で開催されました。その前日の夜はRKC（高知放送）ホールにおいて、大岡昇平、中川久定両氏による講演会「私のなかの島」がひらかれ、また高知県立図書館では5月15日から6月10日まで「江戸時代の世界と土佐」という資料展もおこなわれました。

この大会で発表された研究報告の要旨はつぎのとおりです。

## 【第1日 自由論題】

### ヨーロッパの学界とディドロ歿後200年

— 一日本人の接近 —

永 治 日出雄（愛知教育大学）

#### I はじめに

ルソー＝ヴォルテール歿後200年を記念してセーヌ河畔で国際研究集会が開かれたのは7年前のことです。その集会に遠路参加した私は、研究者の国際的な連携、様々な文化領域の交流に深い感銘を覚えました。初めての外国体験とあいまって、それは私の人生と研究を重要な転機へと導いたのです。ディドロ歿後200年を早くより心待ちし、昨夏渡欧したのもこうした体験からでございます。

ディドロに関する研究の動向と記念行事の企画についてはすでに市川慎一および鷺見洋一の両会員から昨年の大会で魅力的な報告がなされました。また、同年11月京都で催された画期的な国際シンポジウム「ディドロ、および18世紀のヨーロッパと日本」には本学会の会員も数多く出席されました。ディドロをめぐる最近の論議や論究はこのほか色々な形で紹介されています。しかし、ヨーロッパで若干の催しに参じた者として、私の報告は研究集会や記念行事の情景・風俗を伝えることに傾くかと存じます。

#### II 記念行事の輪郭

ディドロ年1984の追悼行事はランスにおける1月の記念式典で開幕し、リオームにおける12月の『百科全書』楽器製造項目展示会まで続きました。フランス文化省から『ディドロ歿後200年』という小冊子が発行されており、そこに載せられた月別行事予定を複写してお手元に配布してあります。御覧のとおり、ディドロを偲ぶ催しは哲学、文学、社会科学、自然科学、技術、演劇、音楽、美術等々の領域に及び、国際研究集会だけでも14ヶ国で26種の企画が準備されました。<sup>(1)</sup>これらの行

事のうち私が参加したのは、フランスにおける7月の記念行事およびイギリスにおける9月の研究集会でございます。

フランス政府の後援のもとにフランス18世紀学会とフランス文学史学会を主体として行われた国際研究集会がディドロ年の頂点を飾るものでした。これは4種の企画が連結した移動式集会で、7月4日から12日まで9日間の長きにわたります。まず、ソルボンヌの大講堂で開会式が举行され、文化相J. ラングとパリ大学総長H. アルヴァイレル夫人の祝辞、実行委員長R. ポモーと18世紀学会会長J. エラルの挨拶を聴きました。ついでパリ郊外のセーヴル国際教育研究センターに会場を移し、7つのシンポジウムが進められます。ここではJ. スタロピンスキーの特別講演『ミルゾーザの足元からジャックの膝へ』が組まれ、また鷺見洋一、中川久定両会員の研究報告も関心を集めました。セーヴルでの集会は討議の課題や報告者の構成において雄大であります、やや総花的で散漫に感じられます。

第5日からはフランスのアンドレ＝マルロー文化会館で「ディドロと演劇」と題するシンポジウムが行われ、ふたつの戯曲が上演されました。ここでは地元の知識人と文化会館の職員が献身的な尽力をされ、18世紀に建造された製造工場穴蔵で名産のシャンペンも提供されます。また、参加者一同は僻村イール・シュール・マルヌに赴き、愛人ソフィ・ヴォランの別荘を訪ねました。<sup>(2)</sup>

さらに、国際研究集会の第7日と第8日は哲学者の故郷ラングルで全市挙げての歓迎を受け、啓蒙の世紀にちなむ多種多様な催しを満喫しました。ディドロの美術批評をめぐる絵画展、彼が耳にした音楽の演奏会、生家の刃物屋を想起させる記念ナイフ、ソフィ・ヴォランへの恋を描く戯曲『恋する哲学者』の公演等々がそれであります。なお、美術館の一角にディドロ資料室があり、新村猛会員の訳業『ダランベールの夢』も陳列されています。また、ディドロにゆかりのある温泉地ブルボンヌ・レ・バンへは回想旅行が用意され、そのさい市庁舎におけるレセプションで中川久定会員が遠来の客として挨拶されました。

なお、国際研究集会に先立ち7月2日からパリで『ディドロ全集』討論集会が開かれました。これは国立科学研究センターの提唱による催しで、レニングラードにおけるソ仏合同研究集会の継続でもあります。ここではエルマン社刊『ディドロ全集』の編纂者を中心に書誌学的な問題が扱われました。三日間にわたる緻密な論議、とくに『ロシア大学案』や『エルヴェシウス反駁』の手稿・版本に関する論議は多くの示唆を与えてくれました。『全集』編纂と同様にこの集会でも指導的な役割を演じたのはJ. ブルーストであります。かねてエルマン社の態度を不満とする彼が、討論集会の最後に爆弾発言を行ったことは、日本へもいち早く伝えられました。

9月初旬のエジンバラ国際研究集会はスコットランドの研究者が世話人となり、エジンバラ大学文学部で4日間にわたり14の報告が行われました。ここでの統一テーマは『ディドロの晩年』という魅力的な論題で、哲学者晩年の生活、活動、政治論、芸術論について綿密な論議が続きます。また、かつてディドロが名誉会員に推挙されたスコットランド考古学協会の講堂でP. フランスの特別講演『ディドロとスコットランド』を聴きました。これは40人程度の小規模な集いで、東洋人の参加者は私しか居りません。18世紀に関する特別な展示会や演奏会もなく、レセプションと懇親会も質素なものでした。<sup>(3)</sup>

一般民衆がディドロ年をどう受け取ったか、私にはよく判りません。1985年はパリやワルシャワが解放されて40年目に当たります。夏にはどの都市でもファシズムの打倒を祝う展示会や記念式典が催され、国民全体の熱気が湧き立っていました。このような雰囲気と比較すると、ディドロの追悼行事は大衆的な盛り上りにやや欠けるようです。しかし、試みに演劇の世界を一瞥しましょう。私が

滞在した夏のパリでもディドロの作品がふたつ上演されました。コメディ・フランセーズにおける『善人か、悪人か』およびアトリエ座における『ラモーの甥』がそれであります。ディドロ年だけにこうした作品が扱われるわけではありません。たとえば、1980年に太陽劇団による『ラモーの甥』とジャン・ルイ・バロー劇団によるヴォルテール作『ザディグ』を観ましたが、いずれも沢山の観客を集め、深い感銘を与えました。フランスの民衆はこのような形で啓蒙思想に親しんでいるように思います。

### Ⅲ 国際研究集会の情景

雑然とした報告になりますが、つぎにはディドロ追悼行事の特徴や情報をお話したいと存じます。フランスにおける国際研究集会には啓蒙思想の長老が勢揃いし、上述のほか国内ではL. ブラヴェル、J. ヴァルロー、J. シュイエ夫妻、R. デスネ、国外からはO. フェローズ、F. ヴェントーリ、J. ラフ、E. ラザドコヴスカ夫人など著名な学者が列席しました。500人を超える参加者のなかでは、近隣諸国の人々は勿論、アメリカ、ブラジル、スウェーデン、ポーランド、ユーゴからの人々が印象に残ります。私が確認したかぎり、日本人の出席者は8名で、ほとんどがラングルまで同行しました。1978年のルソー＝ヴォルテール国際研究集会に比較すると、長老級は似たような顔ぶれですが、中堅・若手層については参加者の構成がかなり違います。研究と関心が細分化されていく傾向がこうした現象を産み出すのでしょうか。日本とは異なって、このような研究集会でも女性の出席者が半数近くを占め、発表や質問にきわめて積極的でした。

さて、半月ほどを外国人研究者と一緒に過した私は、彼らの精力的な日々にあらためて感服しました。第一線で活躍する相当数の人々は、このディドロ年におそらく20ちかくの研究集会に出席し、10以上の学術報告を行ったと思われます。こうした活動の密度は行事日程の組みかたにも現われています。ランスにおけるある一日を取り上げてみましょう。午前7時に大学宿舎で朝食が始まります。シンポジウムが午前の部3時間、午後の部3時間続きました。さらに夕食のあと2時から地元劇団によってディドロ作『父親と子どもたちの対話』が上演され、ついで別の劇場に舞台を移し、新作『白熱した対話—フォントネル、サド、ディドロ』が披露されたのです。貸切バスで大学宿舎に送られ、やっと風呂に入れたのは午前2時でした。

しかし、長期の移動式集会はフランスの持つ歴史の重み、物心両面の豊かさを教えてくれました。たとえば、急行も止まらぬ小都市ラングルが古い街並と城壁を残し、18世紀の面影を留めているのです。市街の中央にはかつてディドロの生家があり、いまは記念の立像が建てられています。そのディドロ広場近くのホテルに泊まった私は、最終日の早朝に散歩を思い立ち、ブルゴーニュの田野や見下ろす長い城壁を一周しました。たとえば、ラングルでは打ち上げの記念祝宴が出身校コレージュ・ディドロで催されました。白亜の典雅な礼拝堂に食卓が準備され、ディドロ追悼の特別献立が供されます。主要な料理はススキとザリガニの煮込み、スグリの実添え鴨の丸焼きですが、盛り沢山の美酒佳肴を全部平らげた日本人は居なかったようです。こうしたブルゴーニュの風土と風俗が社交好きで食欲旺盛な哲学者を育んだのでしょうか。ちなみにルソー＝ヴォルテール没後200年に際してもパリの近郊エルミノンヴィルで午餐会が用意されました。そのときの記念料理は魚介のコーキール、肉詰めホロホロ鳥などでした。

とはいえ、学者の生活態度はヨーロッパでも地味で慎ましいように感じられます。研究集会の宿舎や食事にしても飾り気のない大学の施設と宿舎が多く利用されました。私がスコットランドまで足を伸ばした理由のなかには、研究集会がエジンバラ芸術祭と時期を接したことが含まれます。割り当てられたエジンバラ大学宿舎に着くと、広大な建物は各国から集った若者、すなわち学生オー

ケストラの団員やアングラ劇団の俳優で溢れていました。そうした若者に混って世界的な学者が行列に加わり、セルフサービスで軽食を取る姿は、日本ではなかなか見られません。そして、飲物しかない大学会館の地下喫茶で深更まで二次会が続いたこと、そこで世話人のひとりA. ストルグネル教授から奢られたスコッチの美味であったこと、酒席の話題は早くもフランス革命200年記念の企画にまで及んだことが思い出されます。初めて訪れたスコットランドですが、荒涼たる自然と心暖かな人情が印象的でした。

啓蒙思想を学ぶという連帯感が、国籍や年齢を超えて研究者を結びつけます。ドルバックの著作を中国語に訳し、北京の社会科学院からただひとり参加された管士 総裁にはとくに親しくして頂きました。最終日にパリへ帰る車中で、「写真が出ているよ」とラングルの地方紙を見せてくれたのもこの人です。また、ポーランドへ個人旅行をすると、研究集会で知りあったM. シェベック教授がホテルまで会いに来られました。この人の案内がなければ、御自身が勤務する科学アカデミー日本語科を有するワルシャワ大学、ジェフラン夫人が滞在したワジェンキ公園の城館など見逃したでしょう。自宅に招かれて知ったのは、この活動的な研究者が祖国の伝統とショパンの音楽を熱烈に愛することでした。紅葉に色どられた京都国際研究集会で勿論多くのフランス人研究者と再会しました。

#### IV おわりに

最後に研究者の国際的な交流に関連して自分の苦い悔恨を語らせて頂きます。私の主要な研究対象はディドロではなく、むしろ同時代の哲学者エルヴェシウスであります。エルヴェシウスを継続的に研究する人は、フランスでも日本でも現在ほとんど居りません。ただし、カナダ、アメリカ、ニュージーランド、ソヴィエトなどの学者が優れた研究書を著しています。日本でも一橋大学の根岸国孝教授が1949年と1966年にエルヴェシウス著『人間論』の抄訳を出版されました。ところで、私がエルヴェシウスを志し、根岸教授が亡くなられるまでの5年間、ふたりは同じ東京に住んでいたのをごさいます。しかし、この方にお会いしたり、お話を伺うという考えは、私の念頭にすこしも浮びませんでした。所属する大学と専攻する学問領域が異なったからでしょう。根岸教授がエルヴェシウスの読書会を続けられ、また大変酒のお好きな先生であることはのちに伝え聞きました。

ルソーやディドロに及びませんが、エルヴェシウスについても歿後200年の記念行事が催されました。1971年にブリュッセルで行われた国際研究集会在がそれであります。ここにはエルヴェシウス研究の第一人者D.W. スミスとともに哲学者より6代目の子孫ダンドロー夫妻も列席されました。こうした企画にも当時の私はまったく気がつきません。なんと狭い空間に閉じ籠っていたことでしょう。1978年の渡欧を契機に初めて私は外国人研究者と知り合いました。7年前にベルギーで記念行事が行われたこと、またダンドロー夫妻と各国のエルヴェシウス研究者の間には交流があることもそのとき知ったのをごさいます。それは研究者相互の啓発と親睦のため18世紀学会が設立された年でもありました。

#### 註

- (1) Ministère de la culture, *Denis Diderot-1713~1784-*, Reims, 1984.

なお、最近発行された下記の冊子が、ディドロ年の催しを総括している。これによるとなんらかの記念行事が行われたのは、チュニジア、メキシコ、中国を含め24カ国である。

Société française d'étude du dix-huitième siècle, 1984—*L'Année Diderot*—, Paris, 1985.

- (2) イール・シュール・マルヌ訪問についてはつぎの論稿でやや詳しく述べた。

拙稿「フランス啓蒙思想における理性と感性—ディドロを励ましたもの—」

『思想と現代』第3号，白石書店，1985。

(3) エジンバラ国際研究集会における報告は下記の書物に収録されている。

P. France et A. Strugnell, *Diderot - Les Dernieres années 1770~84* -, Edimbourg, 1985.

たいまつ ともしび  
松明と燈火

啓蒙オペラ文化とヘルダーリンの古典祝祭空間

(思想詩『パンとぶどう酒』冒頭の都市像における光の対位法)

高橋 克己 (高知大学)

「松明と燈火」とは言わば「ヴォルテールとルソー」とか、「啓蒙主義とロマン主義」という対概念である。故に切り離して別々に考えるのではなく、両者が相互対立しながら織り成す明暗を話題としなくてはならない。

静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともしび、  
して松明に飾られて、騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。

『パンとぶどう酒』の冒頭二句である。この二句は単に韻律上で六歩格と五歩格の対句を成しているのみならず、光の明暗（燈火と松明）とか場の対比（街路と大路）とともに、「生成と消滅」の相克をも浮き彫りにしつつ、現存を一色で塗り潰すことなき「調和ある対立」の構図の下に歌い上げている。

韻律上で注目されるのは、各句の後半部である。対句前半なす第一句の六歩格後半では、次第に打ち寄せる律動の波が高潮を目指す。他方、対句後半なす第二句の五歩格後半では、逆に引潮となり文字通り「過ぎ去る (hinweg)」。

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,

Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

第一句後半で高潮なすのは「エァロイヒテテ (erleuchtete)」の部分で、正に此所に「燈火の光 (Erleuchtung)」が宿る。他方「松明に飾られ」た「馬車が過ぎ去る」と歌われる第二句末尾「ヴァーゲン・ヒングェーク (Wagen hinweg)」が、これと好対称なす引潮を形造る。かくして文字通り「燈火」が「生成 (wird)」し、同時に「松明」が「馬車」とともに「過ぎ去る (hinweg)」こととなる。

この「消滅の只中での生成 (Das Werden in Vergehen)」を織り成す明暗を、私は「松明 (Beleuchtung) と燈火 (Erleuchtung)」として擲んだ。この微妙な両語の対比を大胆な比喻で語れば、前述の言葉で「ヴォルテールとルソー」とでも表現できよう。言わば多才多芸に輝く貴族ヴォルテール

# 日本18世紀学会年報

Annual Bulletin of the Japan  
Society for Eighteenth-century  
Studies

第 1 号

1986. 5

---

## 目 次

大会報告要旨	.....
書 評	.....
会 員 業 績	.....
お 知 ら せ	.....

---

日 本 18 世 紀 学 会